
剣華

琴原 鈴音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣華

【Nコード】

N1571P

【作者名】

琴原 鈴音

【あらすじ】

車に轢かれた少女が異世界トリップ!!
任務をこなしつつ、頑張っていく物語・・・の予定です。

彼岸花 *そして私は、はねられました*

「おめでとう!!」 「おめでとう!!」

『ありがとう』

次々と投げかけられる祝いの言葉に、私は『ありがとう』と繰り返す。

「先輩!!」

向こうから後輩の子が、かけてきた。

「おめでとうございます!!」

これ、お祝いの花束です」

バラとすずらん、ガーベラなどを使ったすばらしい一品だ。

『うわぁ すごくうれしい! ありがとう』

「そんなに、よろこんでもらえると、とってもうれしいです。けど、先輩は、すごいですよね・・・剣道、柔道、空手で3年連続、日本1なんですから・・・」

尊敬とうらやましが混ざってる感想

「中学時代を入れると6年連続だよ?」

突如、ちがう声が聞こえた。

『美香!』

声の主は親友の美香、とっても美人さんで
剣道部のマネージャーなんだよ

『どうしたの?』

「直樹が呼んでたよ。一緒に帰ろうって」

どうやら、伝言を頼まれてしまったらしい

『分かった。今日は部活お休みだしね
それじゃあ2人ともまた部活でね!!』

「さようなら」

「またね〜」

二人とも笑顔で見送ってくれた

この笑顔が思い出の顔になるなんて思わなかったよ・・・

☆☆☆☆

『お待たせ』

「いえ、いえ そこまで待ってはいませんよ。
・・・ってか、なにそのスーツケース」

学校帰りのはずなのに、肩からは部活用のエナメルバッグと、手にはスクールバッグ

そこまではいい、しかし、もう一方の手で、ゴロゴロひばってきたのは

海外旅行に使うようなスーツケースだ

『だって今日、終業式じゃん・・・』

だから、置き勉の教科書やノートを持ち帰んなきゃいけなくて・・・』

「それで、スーツケース・・・」

『まあ、気にしないで帰ろう・・・？』

「あはは・・・はあ・・・」

『ため息つくな!!』

「ごめん、ごめん

お礼にスクールバッグは持ってあげましょう」

『本当?! ありがとう!』

わたしの行動に呆れる事があっても、その後、必ず助けてくれる

そんな直樹を私は好きだったし、直樹だって私を大切にしてくれた毎日が幸せで、学校生活に何の不満もなくとっても楽しかったに・・・

☆☆☆☆

聞こえてきたのは、人々の悲鳴と何かがとても速いスピード
走ってくる音

「逃げてえ!!!!!!!!!!!!!!」

その誰か声が耳に届いた時には、
強い衝撃が体を襲って、宙を舞う感覚だったんだ。

彼岸花 *そして私は、はねられました* (後書き)

最近、他の作品を更新してないのに
新しいのはじめちゃいました。

碧血録を見てたら・・・

薔薇 *そして私は、神様に会いました*

☆☆☆☆

「・・・なんで、こんなこともできないの・・・」

「ーーーーごめんなさい。

「ほんと、だめな子ね」

「ーーーーごめんなさい。

「瑠璃はこんなでけるのに・・・」

「ーーーーごめんなさい。

「あなたって、生まれてきた意味あるの？」

—
—
—
—
ごめんなさい。

☆☆☆☆

『あ、あれ……?』

「おっ、気がついたか!!」

見渡すと、社長室のような造りの部屋で、私は、ソファ―に寝転がっていた。

『……あんだ、だれ……?』

この部屋には、1人の青年がいるだけで、他に人はいない

「おおっ! そうだったな! 自己紹介、自己紹介♪
俺の名前は、ルーラルトⅡハンゼリクス
職業は、生と死を司る神! よろしくな♪」

握手を求めてきたので、握り返しながら
ソファ―に座り、職業を確認する。

『か、神?』

「そつ、神さま」

『なんで・・・どうなってんの、直樹は!?』

「まあ、まあ、落ち着けて」

そのことなんだけどな、おまえはもう死んでいる」

あれ、なんか、テレビでやってた アニメ名セリフ、ベスト10
0!

とかにランクインしてた言葉が聞こえたんですけど?

「つまり、おまえは突っ込んできたトラックにはねられ、即死
直樹ってやつは、まだ生死の境目をさまよってる」

『マジ・・・。』

直樹はどうなるの!?

「さあな。俺は運命の神じゃないから、わかんねえ
ただ、本来、死んだおまえはこんなところにこない
死んだものは、天国か地獄に行かされるからな」

『じゃあ、なんでここにいるの?』

「それは、おまえにやってもらいたい仕事があつて
呼んだんだ・・・」

薔薇 *そして私は、神様に会いました* (後書き)

すみません。ほんとはもつと書きたかったんですが
諸事情によりここで止めます

梅 *そして私は、刀を向けられました*

『仕事って・・・？』

いきなり、へんなところで寝てたと思ってたら
仕事の依頼ときた

「そ、仕事♪

まあ、簡単に言うて・・・ある世界にいつてもらいたいんだ
けどね」

神様ならではの仕事だな

『ある世界って？』

とりあえず、話は聞いてみようじゃないか

「薄桜鬼って、ゲーム知ってるか？」

『！？』

知ってるも何も、遊んでましたとも

「知ってるみたいだな。」

おまえは、その世界に行ってもらいたい

この仕事を飲むなら、おまえを薄桜鬼の世界で少しだけど、生き返らせてやるし

戦闘力を何十倍にもしてやる。」

なんか怪しくない？

『・・・ただの、プラスな話じゃないでしょ？』

「やっぱわかる？」

実はさく 地獄に送ったはずの人間達が抜け道か、なにか見つけたみたいで、薄桜鬼の世界に逃げちゃったんだよねく」

『おい!!』

それでよく神、勤まるよな

「つーことで、俺は忙しくて1つの世界に留まらない。そんなところに、死んできたのがおまえさん。」

なんか、剣道とか強いし、ちょうどいつか〜って」

『少ししか、生き返れないっていうのは、どういうこと？』

せっかくなら、向こうの世界でも長く生きたい。

「う〜んと・・・

おまえを行き返させるのはルール違反、特例みたいなもんなんだ
だから、逃げた奴ら、全員始末したら自然と体が消えてくだよ。
おまえにも拒否権はあるから強制じゃない、どうする？

仕事を 引き受けますか？ 拒みますか？」

『やるに決まってるじゃない！』

少しでも、もう1回生きれるなら生きたいし、
運動が特技の私にとって戦闘力upは魅力的だ。

ただ・・・

『直樹がどうなったかを報告するのも条件にいれて』

「いいぜ。

それじゃあ、今からおまえを薄桜鬼の世界に送る
向こうに着いたら、千鶴がいるから話しかける

・・・それじゃあ、がんばってこいよ」

☆☆☆☆

パツってフラッシュしたとおもったら、ほら今でいう龍馬伝みた
いな。

まじで、時代劇のなかだよ!!

『そうだ、そうだ千鶴ちゃん捜さなきゃ』

わたしがいるところ家と家の間なんだよね・・・
狭いよ・・・

とりあえず大通り出てみたけど、
やっぱすげー!! みんな着物とかだよ!!
感動もんだよ

『あっあれ・・・!』

たぶん、神様のはからいなんだろうな
すぐに千鶴ちゃん見つかったよ

『こんにちは♪

なにか、困ったことがあるの?』

アハハ、めっちゃ困った顔してるよ（泣）
そりゃ、そうだよ。変な服（ブレザー）に変なバック（スクー
ルバック・スーツケース）
だもんね。

せめて、着物、着てくればよかった。

「あ、えっと、人を捜してまして・・・」

私の感情が顔に出たんだろうな
あわてて、言ってくれたよ。本当にいい子。

『なんて名前?』

「ゆ、ゆきむらこうどう　　っていう名前なんですけど・・・」

『特徴は?』

「医者をやってて・・・年齢は「よお、その坊主、いい刀もってんな」

からんできたのは浪士だ。

うまいぐあいに、話が進んでく。

よかった。私が入ったことで原作が変わってなくて・・・

パシッ!

突如、手が握られて、引っ張られながら、走り出した

「逃げましょう!!」

あれ、なんかいつの間にか、逃げる場面に入ってたよ・・・

☆☆☆☆

『「ハア・・・ハア・・・」』

現在、逃走をやめて、物陰に隠れています。

「追ってきますかね・・・？」

『さあ・・・どうだろ？』

本当は知ってるけど、嘘をつかなきゃ

「くそっ どこに行った」

「あっちを搜してみよう」

だんだん足音が近くなっていくけど、次の瞬間・・・

人が、斬られ、倒れる音が耳に届く
そして、普段聞くことのない奇声と血を求める声

ガタッ・・・

あゝあ、やっちったな千鶴ちゃん

羅刹たちがこちらを向く

「血い・・・」

これ、絶体絶命だね・・・
しょうがない、わたしが・・・

ザシュ！！！！

一瞬だった。本当に一瞬、目を逸らした瞬間に羅刹たちの
体が斬られ、血飛沫が飛び、絶命した。

そして、今、羅刹達を殺した刀は私たちの前にある

「いいか、背をむければ斬る」

わたしって、殺されないよね？

すずらん *そして私は、尋問されました*

うららかな朝の日差しが差し込む部屋の中
わたしと千鶴は・・・

縄でグルグルまきにされてます。

これね、結構痛いんだよ？
ふつう、ここまでするか？
千鶴ちゃんも苦しそうだし、解こうかな

『よいしょつと・・・！』

バラバラと縄が下に落ちる
実はこれ、怪力使ったとかじゃなくて、
昔、テレビとかで見た 「誘拐されて、縄で縛られそうになった
ら、一工夫で、

縄が自力で解けるようになる」 ってやつを利用したからなのさ！！

テレビっていい知識くれるよね。けど
それよりも、千鶴ちゃんの縄、解かなきゃ

『千鶴ちゃん、千鶴ちゃん!』

「うっ……」

『大丈夫? 今、縄解くから立ってもらっていい?』

千鶴ちゃんを立たせて縄を解く
たぶん、まだ井上さんは来ない……なら、おしゃべりするしかないでしょ!

縄を部屋の隅に置いて、向かいあわせに座る。

『お互い、大変なことになっちゃたね』

ねぎらいの言葉をかけてみる
しゅん、ってなあって子犬みたい♪

「は、はい……、えっと、そういえば名乗ってないのにどうして私の性別や名前を?」

『そ、それはね、千鶴ちゃんが、かわいいから女の子だってわかったんだよ。名前のことは……秘密♪』

「えっ……?」

『ごめんね。知ってたとしか今は言えないの
話せるときがあったら、話すから』

「・・・分かりました。」

ふー、どうにか納得してくれたよ。
よかったぜ・・・

『ねえ、ねえ、こっちからも質問していい？』

私がピンチな質問されないように、こっちから矢のような質問をした

たとえば・・・

☆どこから来たのか、目的はなにか

☆好きな服や色

☆食べ物のことや江戸の名所など

やっぱ、時代を超えてもガールズ・トークは、盛り上がるよ

☆☆☆☆

はい、これから結構飛ばしていきますよ

ガールズ・トーク中、井上さん登場で広間に

(あんとときの殺気はすごかった)

＊縄のことは大目に見ても

らった

←

1回部屋に、戻される(平助のやつめ・・・(怒))

←

2人で逃げ出そうとしたところ、捕獲↓再び広間へ
(千鶴ちゃん、捕まったとき猫みたいだった)

←

千鶴が京都にきた理由を話す↓屯所で保護決定
(行動力あるよね)

←

千鶴、部屋に戻され、私の尋問

☆☆☆☆

と、言うわけで今、広間には私と幹部しかいません
笑うしかないくらい、怪しむ目を向けられてるよ・・・

「お前の名前をまだ聞いてなかったな」

土方さんが聞いてきた

『・・・あきい暁です』

「男みたいな名前だな」

『本当に・・・』

私も、そう思うよ、永倉さん
ちなみに私は、もろ女の子！な服を着ていたから、鈍感グループ
も一発で気づいたらしい

「苗字はなんだ？」

『ありません』

土方さんの額にしわがよる

『正確には、奪われたって言うほうが正しいですね』

「奪われた・・・？」

『苗字の話は、関係ないので他のことを
質問したほうがいいですよ』

「じゃあ、なんで暁と千鶴は、あの夜一緒にいたんだ？」

いきなり呼び捨てかよ平助君……
まっいいけどね。

『千鶴ちゃんが困っている所に話かけて、そこで
浪士に絡まれて、一緒に逃げました。』

わざとですけど

「どうしますか？土方さん

千鶴ちゃんみたいに、この子には利益がありませんよ」

要注意人物、沖田さん

『そんじゃー殺せば……？』

「「「「「！！！」」」」」」

まさか、本人の口から言うとは思ってなかったみたい

『利益のない人間の口封じには、殺すのが1番でしょ？
ましてや、〔羅刹〕を知ってる人間なんて、生かしておくだけ、

迷惑だ・・・でしょ？」

「！！　どこで羅刹のことを・・・！！」

おっ、さすが土方さん「羅刹」って単語入れたの気が付いた

『幕府からの勅命で、行っていた実験でしょ？

わたしは、羅刹のことや新選組のこと詳しく知っています。

でも長州の間者とかじゃありませんし、ここに留まる千鶴ちゃんをおいて、逃げるつもりありません。ただこれだけは、言っておきます。私は、新選組の・・・近藤さんの邪魔になることはしないです。それは約束します。

私には、帰る場所がなく、家族もいません、

だから、殺してしまっても構いませんが、

もし、生きることができるなら、私としてはもう少し生きたいです』

いちおう、本心も入れておくけど、殺されたら、殺されたで神様がまた生き返らせて

くれるだろうから、どっちでもいいや

「・・・わかった。暁くんも屯所で保護しよう」

今まで、黙っていた近藤さんから衝撃発言

「近藤さん!!!!」

「逃げないって言ってるし、こんな若い娘さんが生きたいと言ってるんだ。殺すのは、かわいそうだろ

・・・ただし、屯所では男装をしてもらうけどいいかな」

『大丈夫です。お心使い、感謝します』

正しいやり方は、わかんないけど、ちゃんと正座して、頭をさげた

「怪しい動きとかしてたら殺しちゃうから」

沖田さんが笑顔で言うってくる

『肝に命じときます』

「これで、屯所に女の子が2人か」

「華やかになるな」

「もう、しんぱつつあんも左之さんも、暁に変なことすんなよ」

やっぱり、3人組はいいね、見えて楽しい

沖田さんと山南さんは気をつけなきゃいけないそうで、

土方さんと斉藤さんは視線がこわい

近藤さんと井上さんは、お父さんだよねゝ

あつそういえばここで暮らしていける事になったけど
神様と連絡ってどう取るの？

百日紅 *そして私は、犬に会いました* (前書き)

今回のサブタイトルは、「読めない花の名前」にしてみました。
みなさんは、読めましたか？ 私は読めませんでした。

ヒント…木の名前で、動物の名前が入っています。

百日紅 ＊そして私は、犬に会いました＊

スパツ・・・

『すう~~~~~つ

あっさだ~~~~~

~~~~~』

おはようございます！曉でございます！みなさんはよく眠れましたか？私はビミョーでしたよ。なんたって昨日は羅刹 見たからって、殺されそうになるし。なんだかんだいってここにお世話になることに決まったけど、男装で過ごすから

和服に着替えたけど昔の服はよく分からなくてちづるんに質問したらドン引きされたし（異世界&トリップ言っていない からね）それに荷物は返してもらったけどこの時代のお金と私の時代のお金は違うし電気は通っていないから携帯とか使 えなくなるよね（あっ充電なくなる前に組長たちの写真とっておこう！）え？こんな性格だったかだって？なに言って

るんですか私はもともとこんな性格ですよ。前話まではちよっと真面目だったっていうか・・・

「ねえ、うるさいんだけど」

障子の横あたしから見て、右側から声が掛かる

（心の声聞かれたわけじゃないよ!? 『朝だ〜!』のほうだか  
んね!）

『あっおはようございます・・・そーちゃん』

「殺させたいの?」

そーちゃんこと、沖田総司が刀に手をかける

『いえいえいえ!ただ、仲良くなりたいな〜と思って!  
ほら、千鶴ちゃんも「ちづるん」になりましたし!?!』

「ふーん、別にいいけど。君、きがえなくていいの?」

『あ・・・』

現在の姿は寝巻き（ねまき）、いくら幹部たちがいるほう（八木  
邸）だからって

女ってバレる格好はよくないよね。

ちづるんは同じ部屋だけど、もう障子しめられて着替えている（泣）

『き、着替えてきま〜す！！』

それからっ！「君」ってやめてくれない？ 睨って読んでね☆ちやん付けもだめだから！』

部屋に入ろうとするのを1回止めて、指をさす

なんか、君だとめっちゃ他人みたいでやだし、ちゃん付けだとあたしの名前的にオカミみたい・・・

「うん。わかったよ。」

『よし！』

暁は満足気な様子で部屋に入っていく

パタン

「なんか、おもしろい子がやってきたね・・・」

総司の声はだれにも聞こえず、空へ散る

☆☆☆☆

『それでは、手を合わせて』

パン！

『「いただきます」』

現在、あたしとちづるんは着替えを済ませて朝食をいただいております。

なんていうんだろうね？素朴な味？なんだけどおいしんだよね。

今日は当たりの日だよ。ちづるんとの他愛のない話も楽しくていいんだけど・・・

『はーさん、あなたも部屋へ入りませんか？』

今ははーさんが見張りなんだけど、威圧感があるんだよ。  
さっきは、着替えだったからそーちゃんを部屋に入れられなかったけど、いまは別に大丈夫じゃん？（あっ はーさんて、斉藤さんのことね）

「いや、遠慮する」

『部屋の中にいる私たちが申し訳ないですよ!!』

だって今、真冬よ!？そんな中、廊下に居させたら風邪ひかす。

と、いうわけで、無理やり部屋に連れ込み―（拉致）成功

3人でしゃべりながら（はーさんはほとんどしゃべないけどね）  
朝食を

終えようとしていた時に、障子の外で音がするから、

1番、障子に近かったのはーさんが開けると、勢いよくなが部  
屋に

入ってくる。

『わっ……!!』

その何かは、その勢いのまま、暁に飛びついた

「犬・・・？」

「そのようだな」

被害にあわなかった2人は呆気にとられてる

『ちよっ・・・どいて・・・』

ワン！！

『いや・・・ワンじゃなくて・・・』

犬の下敷きになっていたあたしを、ちづるんが犬をだっこして救ってくれた。

「暁、大丈夫？」 ↑呼び捨て強制にさせましたとも

『どうにかね・・・』

倒された体を起こす

「どこから入ってきたんでしょうか？」

ワン!!

その犬が暴れるのでちづるんが離してあげると、暁の前に来て顔をあげ、首輪についている手紙を見せ付ける

『手紙が付いてるね……どれどれ……』

2人にも分かるように読み上げる

『こんにちは！暁さん！お元気ですか？

実はあなたに差し上げたい物がございます……？

今、近くにいる犬が持っている刀です。よろしければお使いください……』

『「刀……？」」』

『そんなものなくね？』

「いや、あるぞ」

はーさんが指をさす先、廊下には、さっきまでなかった刀が置いてあった



**百日紅 ＊そして私は、犬に会いました＊（後書き）**

なんか、うだうだ続きそうなので前編としてここで切ります。  
刀を送ってきたのは、後編でわかります。

そして、『百日紅』の答えはサルスベリと言う木でした。  
分かった人いるかな・・・？

菊 ＊そして私は、観戦しました＊

私がこの世界で、できること・・・

それは・・・人を殺していくこと・・・

☆☆☆☆

『ひまだね』

「そうだね・・・」

軟禁状態が続いている現在、下手に動くと、命の危険があるので、  
結局、部屋で大人しくしているしかない。

「ねえ、暁・・・いつになったら、父様、探しに行けるかな・・・」

あつそういえば、そろそろ、イベント（斉藤VS千鶴や3人組の話など）があるころか・・・

『うーん、私も隊士じゃないから、分かんないけど。  
こういう時は組長以上の人をお願いしてみるのが、いいんじゃない？』

「組長以上の人・・・」

『そー、そー。ってわけで、部屋にいてもしょうがないし、誰か探しに行かない？』

「それは・・・勝手に出て行っちゃまずいんじゃない？」

眉をよせて、複雑な顔をする。

ちずるんも、本当は行きたいけど、良心が疼くのかな？

『心配しなくてもちずるんなら、一般隊士に見つかることなく幹部見つけられるから、大丈夫！！』

・・・原作通りに進めばだけどね。

「なんで、そんなこと分かるの？」

『私の勘がそう言っているのさ、ちづるん!! さあ、どこに探しに行きましょう?!!!』

「もう探しに行くことは、決定なんだ・・・。

それなら、庭へ行ってみるのはどうか・・・?」

ほ、ほう。沖田・斉藤ルートですか♪ すまん3人組、あんたらはまたいつかのイベントで!

『そうと決まったなら、レッツ、ゴー!!』

「れ、れつつ・・・?」

ああ、英語ってまだないんだっけ・・・めんどくさ!!

☆☆☆☆

『おはようございます、そーちゃん、はーさん』

原作と今のところ、あまり狂いはないようで、うまく進んでいく。

よ、よかったぜ・・・

「おはよう。あれ、なんで2人が、こんな所に居るの？」

『ほら、ちづるん、自分でしっかり、言いなさい。』

あれだ、気分は母親な感じでちづるんを前に出す。

「じ、実は・・・そろそろ父様を探しに外へ出たいなと思って」

「それは無理だ。

おまえの護衛に割く人員は整ってない。」

はーさん、一刀両断。なんか、心にグサってくるよね。

「・・・何とかなりませんか？

別に遠出したいわけじゃないんです。ちょっと屯所の周りだけ

でも・・・」

おお、がんばれ、ちづるん！

「んー。僕たちが巡察に出かけるとき、同行してもらうのが一番手っ取り早いかな」

「!?!」

そーちゃんからの、思わぬフォロー!! (今の気分は、実況者)

「でも、巡察って命がけなんだよ？僕たちが下手を打てば死ぬ隊士だってでる」

あゝ！やはり沖田総司！最後は崖から突き落とします!!

「浪士に殺されたくないなら最低限、自分の身ぐらい自分で守ってもらわないとね」

悪魔の笑みだ、あやつは悪魔の笑みを浮かべてるうゝ！

「わ、私だって護身術ぐらいなら・・・」

いけー！ちずるん！悪魔を倒せー！

「ならば俺が試してやろう。腰のものが飾りではないと証明してみせろ」

まじかよ、まさかの選手交代！？↑（暁は原作を知っているよ！ふざけてるだけだからね！）

「確かに護身術は習いましたし、小太刀の道場に通ってましたけど・・・！」

おもわぬ選手交代で、ちづるん悪戦かー！？

「加減はしてやる。遠慮は無用だ。どこからでも打ち込んでこい」

「でも・・・！！」

「・・・どうした、雪村。」

その小太刀は、やはり単なる飾りなのか」

やばいぞ、ちづるん。追い込まれてしまったぜ！

「・・・そんなことはありません。」

近所の道場に通っていたのも本当です。・・・でも、斬りかかるなんてできません！

刀で刺したら、人は死んじゃうんですよ！？」

・・・うん・・・なんて言うんだろ・・・あれだよ、ちづるんってときどき爆弾落とすよね。

「ふっ……。あは、あはははははは！」

あ、そーちゃんが腹を抱えて笑い出した。

「何も、笑うことないじゃないですか・・・」

「斉藤君相手に「殺しちゃうかも」なんて、不安になれる君は文句なしにすごいよ。最高！」

「・・・うー」

ちづるんが膨れてるよ。かわゆいなく♪、

けど、このまま、そーちゃんにからかわれるのは、かわいそうだから、お助けしてあげよう

『ちづるん、ちづるん』

「どうしたの？」

『ちづるんの言うことも分かるけどさ、今ここで、自分の腕前を示しておけば、

そーちゃんやはーさんが、ちづるんの外出、前向きに考えてくれるかもよ?。』



「それって・・・」

『彼らなりの、気づかいかもね?』

さあ、ちずるん!がんばって魔王(斉藤)を倒すのよ!↑(実況再開)

「どうしても刀を使いたくないと言うなら、鞘を刀代わりに使うか、峰打ちで打ち込め」

「・・・・。」

少しの間、考えこんでいたようだが、顔をあげ、はーさんをまっすぐに見つめた!

「・・・・よろしくお願いします!」

おおっと、ちづるんがお願いしたら、はーさんが少し笑ったぜ! レアショットだ!レアショットが今起こったぞ!

「行きます!」

ちづるんが、声を張り上げ、はーさんに向かって大きく踏み込んだ！

カキン・・・！！！！

・・・一瞬のうちに勝負がついた。

ちづるんの刀は弾かれて、地面に刺さり、はーさんの刀はちづるんの首、ぎりぎりの所で止まっている。

「師を誇れ。おまえの剣には曇りが無い。」

「え・・・？」

「太刀筋には心が現れる。おまえは、師に恵まれたのだろう。」

そう言うとはーさんは、首から、刀を離す。

『だいじょうぶだったかい？ちづるん』

見たところ、怪我はないから一安心。

「うん・・・だいじょうぶ。・・・今は・・・？」

「やっぱり驚いたかな。斉藤君の居合いは達人級だからね」

そーちゃんが刺さった小太刀をちづるんに渡すが、しびれていて落としそうになった。

「あの、居合って・・・？」

ちづるんが遠慮がちに聞く

「帯刀状態から、抜き打ちの一撃を放つ技だ。」

「居合いは片手で抜き打つことが多いから、結果的に威力が下がって実用性は低いなんて

言われることもあるんだけどね」

『けど、はーさんの場合、一撃必殺だよ。』

よかったね。もし、敵だったら刀弾かれた後、即座に追撃してトドメを刺されてたよ？』

「これが、居合い・・・」

手合わせをしたことで、これが、幹部たちの実力だと思おうと背筋が凍る。

「……落ち込むことはないと思うが。

おまえは外を連れ歩くに不便を感じない腕だ」

「え？」

「斉藤君のお墨付きかあ。これって、かなりすごいことだよ？」

沖田さんが笑いながら、拍手してくれた。

「じゃあ、私……外へ連れて行ってもらえるんですか？」

目を輝かせながら聞いている。よっぽど探しに行きたいんだろう。

でもね……

『ちづるん……喜んでいるところ申し訳ないんだけどさ……  
今、外出禁止令だした本人は、大阪出張中だよ……  
。。』

ああっ、シュンってっちゃった。ごめんよ。私が副長なら、すぐにでも許可出すのに……

「あ、暁のせいじゃないよ！それに暁が誰か探そうって言うてくれたから

外出に一步近づけたんだから！」

あれ、私も顔に出やすいのかな・・・？慰められちゃったよ。  
はーさんを見習ってポーカーフェイス、頑張ってみようかな？

『ありがとう♪さあ、用も済んだし、部屋に戻ろっか？  
一般隊士の人が来ると、面倒だからね』

そう言って、イベントが見れて大満足な私は大人しく部屋へ戻ろうとした。

のに・・・！！

『ぐえ・・・』

襟をつかまれて、変な声を出してしまった。

「ねえ、暁は僕と勝負しないの？」

『あははは・・・？』

ああっ余分なイベントまで起きてしまった・・・

**菊 \*そして私は、観戦しました\* (後書き)**

あれ、……。なんか前話で、暁の刀のなぞは次回、わかります！  
とか、言っておいて、結局、分かってねーじゃん！

すみません。本当に無計画で進めている作品なので、こうなることも多くあると思うので、暖かい目で見守っててください……。。

ハクモクレン \*そして私は、戦いました\* (前書き)

長い間、お休みしてすみませんでした。  
これからも、のらりくらりと頑張っていきます。



ハクモクレン \*そして私は、戦いました\*

『あれ〜？なんで、そーちゃんと勝負しなくちゃいけないのかな〜？』

イベントが見れて満足な私が言った言葉に対して、あやつは真っ黒な微笑で言いました。

「だって暁も刀、貰ったんでしょ？」

・・・そうだったよ。・・・実は・・・

☆☆☆☆

はーさんが指差した先、そこには刀が置いてあった。

『あり？いつの間に・・・？』

ポイツと手紙を捨てて、刀に近寄る。

手紙はもういいや。差出人はどうせあいつ（神）だろ。  
持ち上げ触ってみる。

うん。重さも、長さも一般の刀と変化なし！

あえて違うところを言うならば、鞘にものすご〜く細かい、  
いろんな種類の華の模様が彫ってあることかな？

「暁、貸してくれ」

横から見ていたはーさんに、刀を渡す。

はーさんは、密書などが仕込まれていないか、入念にチェックして  
いるみたい。

そりゃそうだよねえ、身元不明の子の元に、犬を使って刀を送るん  
だもん。

なんにもないほうが、おかしいか。

「暁・・・この手紙、二枚目があるよ。」

ちづるんは、ほっておいた手紙を拾い、調べていたみたい。

『なんて書いてある〜？』

「えっと・・・」追伸、刀を運んできた犬の名前は小豆こまめと言います。  
かわいいでしょ？」

うわーっ！！！！果てしなくどうでもいいんですけど！！なんなの！！  
暇なの？！そんなこと書いてる暇があるなら、仕事やれや！

「他には、なにも書いていないのか？」

刀を調べていた、はーさんが顔をあげて、ちづるんに聞く

「いえ、まだあります。」「晁さん、その犬飼ってね、よろしくね」

俳句~~~~！！！！この人仕事してないでしょ！！なにこの人、五七  
五でそろえてんの！！（実際には、五八五んだけどさっ！！）

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』

『どうしましょ？その刀、あたしが貰っていいのかな？』

内心は、どす黒くなってるけど、そんなのクールビューティー&プ  
リティーガールに見せられないわ♪

たとえ心の中は嵐だとしても、いつもニコニコガールがモットーだ  
わよ！

「いや、しばらく預からせてもらう。」

そういうと、ちょうど通りかかった平助に見張りを交代してもらい、はーさんはどこかへ行ってしまった。

おおかた、土方さんのところに行つて（出張前）、二人で調べるの  
だろう。

ということで、私たちは小豆と一緒に遊びながら待ちましたとき。

・・・回想終了！！

☆☆☆☆

というわけで、予想を裏切り普通の刀だったんで、今は手紙どおり、  
あたしの刀になりました。

『あはは・・・でも今はあたし、刀持っていないよ？』

あたしは、言ったとおり身に着けてないんだよね。  
だって重いじゃん？危険じゃん？

「しょうがないな〜それじゃあ僕が特別に取ってきてあげるよ」

美形の笑顔が目の保養以外に恐怖を生み出すなんて、生前は知りませんでした。

『……どうしても?』

「どうしても」

ちらっと後ろをみたけど、さっきの二人はのんきに天気の話をしてるよ!

アハハッぜんぜん助ける素振りすらないなっ!!・・・悲しい・・・

『しょうがない。今日はそーちゃんのイケメンに免じてお相手しましょう!』

「なにを言っているのかよくわからないけど、うれしいよ」

手のひらを合わせ、呪文を唱える。

『召還!! いでよ小豆!!』

すると、目の前に煙がおき、中心から犬が飛び出す……………

わけもなく、小豆が向こうから走ってくる。

「……暁って、いつもよく分からないことするんだね……」

『演出だよっ！そーちゃん！！』

小豆の喉を撫でてやり、小豆の背中につけてあった刀を外す。

「暁って、犬に刀を預けてあるの？」

『うん。あたしは隊士でもないし、小豆がもってきた刀だから小豆に預けてるんだ。』

さすがに、屯所から出るときは、自分で身につけると思うけど、それもいつになることやら……

『さあ！いっちょ始めますか』

「うん。間違って斬っちゃたらごめんね。」

『間違えても斬らないでね？』

このやろーわざと言っておりますな!!

☆☆☆☆

「ねえ、来ないの？」

構えてから数分、お互いの様子を探り合い、向こうは分かんないけど、あたしは動こうにも動けずにいる。

『そちらから、どうぞ?』

「じゃあ、遠慮なくっ!!」

沖田の容赦のない一撃が繰り出される。

『っ……!うえいっ!!!!』

とっさに横へかわして攻撃を回避する。

が、さすが組長、すぐに勢いを殺さず、刀を横へ滑らす。

『ちっ・・・!!』

刀を盾にして、攻撃を吸収しながら後ろへと飛び退く

「へへへ案外、運動神経いいんだね。」

『それでも、学問より運動派だからね☆』

笑顔には笑顔で対応するが、やべーよ!!ガチで殺されるんですけど!!

今頃、神に戦闘力UPしてもらわなかったら、2回目の攻撃で死んでたわ!!

あっ!今あいつの存在が始めて役立ったよ!!

今度会った時、すぐに斬りつけることは無しにしてあげようっ!!

「そっか、じゃあ続けるよ」

時々、刀を交えながら、次々と繰り出される攻撃に、紙一重で避けていく



それが段々、そーちゃんを苛立たせてしまったようだ。

「ねえ、いつまで避けてるつもり？」

ヒイィ！！笑顔が・・・！！笑顔が・・・！！

『アハッ・・・あはは・・・』

笑うこと以外に何が私に出来るというのだろう。

私が攻撃なんかしたら、すぐに隙についてやられじゃねーか。

「攻撃しないんならつまらないし、そろそろ終わらせてもらおうかな」

沖田が私との距離を詰め、一度大きく踏み込む

・・・これってあの有名な「あの技」じゃない？

だったら、利用させてもらいましょう！ホトトギス！

キンッ！！

キンッ！！

一回、二回、・・・

繰り返された突きを刀で弾き・・・

ガキンッ！！

三回目の突きで、わざと刀を握る力を弱める。  
すると、当然のごとく刀は宙に舞い、地面へと突き刺さる。

ちなみにそーちゃんの刀は、現在進行形であたしの首の横にあります

『あゝ・・・負けちゃった・・・』

そーちゃんの刀を避け、自分の刀を鞘に納める。

「暁っ！！大丈夫？」

マイスweetハニーちづるんが寄ってきてくれる。

途中からは見ていてくれたようだね

『大丈夫！！大丈夫！！殺されるかもって思ったけどね！！  
さっ！もうちづるんの用事も済んだし、部屋戻ろ？はーさん、そー  
ちゃんお邪魔しました！』

「あっえ、えっと・・・ありがとうございました!!」

ぐいぐいとちづるんの手を引っ張って部屋に戻る。

怖かったよ!死ぬかと思ったよ!殺されるかと思ったよ!!

☆☆☆☆

ゆっくりと刀を鞘におさめる

「・・・暁、最後にわざと力を抜いて、刀を弾かせたよ。」

「!・・・何故なにゆえそのようなことをした?」

「さあ?あの子には不明なところが多すぎるよ。」

視線の先には、二人の少女と犬

また一つ、運命の齒車が動き出した。

「今日の反省」

☆美形の笑顔は、目の保養以外にも使い道はある☆

B  
Y  
暁

**ハクモクレン    \*そして私は、戦いました\* (後書き)**

最後に沖田さんが繰り出した技は3段突きというやつですね。

そして、すみませんでした!!

戦闘シーンを書くことは、大の苦手なんです!!

いつも以上に読みにくいと思いますが、ご勘弁ください・・・。

**椿 \*そして私は、空気になりました\* (前書き)**

最初に言っておきます。

ビミョーすぎるお話です。

ごめんなさい・・・

始めの「☆☆☆☆」まで読んでくだされば、次話に問題ありません

**椿 \*そして私は、空気になりました\***

『ん？その銜くわえている紙はなんだい？』

小豆こまめが持ってきたのは、手紙

今ちづるんはこの部屋にいないから、いそいで目をとおす。

『・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・、か・・・』

今宵、行うのはここへ来た目的・・・

自分が生き残るための行動・・・

☆☆☆☆

空は紅く染まり、月が空を支配の準備をはじめるとき

「・・・・・・・・いつまでこんな生活が続くんだろう？」

話す相手が消えてしまうと、気持ちが後ろ向きになってしまう。

「父様のことも心配だけど、いつ外出許可が下りるかは出張中の土方さん次第だし・・・」

「今は待つしかないよね・・・」

進まないことを考えるのは、不安を募らせるだけだ。

「でも・・・」

ささやかな救いはある

「皆、良くしてくれるし」

正直な所を言えば、新選組を完全に信用できたわけではない  
彼らは簡単に人を殺せる

私や暁の事も状況によっては簡単に殺すだろう  
だけど・・・

「きっと、根はいい人たちなんだよね」



「君さ、だまされやすい性格とか言われない？」

「!!?」

急いで振り返ると、何故か沖田さんが居た。

「ど、どどど、どうして沖田さんが!!?」

「あれ、もしかして気づいてなかったとか? この時間帯は僕が君達の監視役なんだけどな」

「.....」

そういえば私たち、監視されてるんですでした。

.....と言うことは。

「もしかして、私の独り言も全部・・・?」

「ん?」

もちろん彼は聞いていたとは言わなかった。

ただ、きらきら輝く笑顔で私を見つめていた。

「.....」

聞かれてた!!これ、もう絶対聞かれてた!!

私が声にならない悲鳴をあげたとき、何故か襖の影から、斉藤さんが現れた。

「総司。無駄話はそれくらいにしておけ」

・・・。。。

「斉藤さんも聞いてたんですかー!?!」

「・・・つい先ほど来たばかりだが」

「良かった・・・! すみません。私いきなり声をあげたりして・・・」

「気にするな。・・・そもそも今の独り言は、聞かれて困るような内容でもないだろう」

「!!!」

内容より、独り言を二人に聞かれたという事実が恥ずかしい

「夕飯の支度ができたんだが、・・・邪魔をしたらどうか?」

「いえ、邪魔とかじゃないです!!」

あわてて首を振った。

と、その時、ばたばたと廊下を走ってくる音が聞こえたかと思うと、藤堂さんが顔を膨れっ面にして覗かせた。

「あのさー、飯の時間なんだけどー」

「すまん、平助。今いく」

「はいはい、千鶴も急げって。早くしねえと食うもん無くなっちゃうからね」

「ごめんなさい、藤堂さん。すぐに行きます」

行きかけた藤堂さんが立ち止まって、困ったような顔で口を開いた。

「あー、その「藤堂さん」ってやめない？みんな「平助」って呼ぶから、それでいいよ」

「で、でも・・・いいの？」

「いいの、いいの。暁なんて「平ちゃん」って呼ぶんだぜ」

・・・いつの間にか、いろんな人をあだ名で呼んでいる暁が一瞬、恐ろしくなりました。

「じゃ、じゃあ・・・平助君で」

「そそ、それでいいよ。んじゃ、早く行こうぜ」

平助君が私の手を引っ張って、広間に向かっていった。

「・・・・・・・・いつまで狸寝入りしてるつもりなの？」

部屋に横たわっている、もう一人の住居者に蹴りをいれられた。

『痛いよ、そーちゃん』

蹴られたお腹を押さえて、立ち上がる。

『あゝちづるん可愛かったゝあっ二人とも私が起きてたこと秘密にしといてね。』

「何ゆえ、寝たふりなんかしていた。」

『えっだって、ただでさえ二人に独り言聞かれて恥ずかしいちづるんがあたしにまで聞かれてたって知ったら可哀想だなーって』

ずっと同じ格好をしてたから、体をひねると、ボキボキと音が鳴った。

『さっあたし達もご飯食べにいこう。はーさん今日のおかず何?』

「今日は、煮物だ」

『煮物かーそーちゃん、お酒ばかりじゃなくてちゃんとお野菜も食べないと体に悪いし・・・』

「おい早くしねーと、新ぱっつあんきれるぞ」

割って聞こえてきた平助の声で待てていたことを思い出す

『やっぱ!、食べ物への恨みは恐ろしいんだ!!はやく行こう!!二人とも!!』

左手にはーさん、右手にそーちゃんの手を握り、走りだす。

さあ広間へ行こう!!

「今日の反省」

☆本当は鈍感カップルに前進してほしいくて、狸寝入りしました☆

**椿 \*そして私は、空気になりました\* (後書き)**

この主人公の登場の少なさ!!

そして物語の進展の遅さ!!

作者が1番好きなカップルは平助と千鶴なんですよね。

なので藤堂さん↓平助君読みはどうしても入れたかったんだ!!

山茶花 \*そして私は、ごはんを食べました\*

「遅えよ」

「おめえら遅えんだよ。この腹の高鳴りどうしてくれるんだ？」

広間に到着したあたし達五人（走ったから途中で平ちゃんとちづるんに追いついたんだぜ）を原田さんと新ぱつつあんが迎えてくれる。

「ただ腹がなってただけだろ」

「うるせえお前らを待っててやった俺の寛大な腹に感謝しやがれ」

「新八、そりゃ寛大な心だろ・・・いいから食べようぜ。まあ自分の飯は自分で守んなきゃいけねえけどな」

『すみません。原田さん、突然ですが、左之にい、と呼ばせてもらっていいですか?』

「・・・べつにいいけどよ。どうしたんだ急に?」

『あなたのエロスパワーに殺られました』

「「「は?」」」

☆☆☆☆



「今日も相変わらずせこい夕飯だよなあ。というわけで・・・隣の晩御飯、突撃だ!!!」

「弱肉強食の時代、俺様がいただくぜ!」

「ちょっと、新八つつあん!なんで俺の飯ばかりねらうかな!」

向こうに並んでいる、平ちゃん新八つつあんコンビはおかず争奪戦ちづるんと左之には、なかよくお話をしているが、わたしはそれどころではない

「どうしたの暁?お腹いたいのか?」

『えっ、ちがうよ。どっちかと言うとあだ名コンプリートが着々と進んで気分はハッピーだけださ』

もうお酒に切り替えているそーちゃんが隣の1番端の席、そこが私の指定席化している

ちなみに新八つつあんのあだ名は見張りしていた時に承諾してもらったのだ!!

「暁ってところどころ分からない言葉いれるよね。コンプリートとかハッピーとか・・・あ、あとエロスパワーとか・・・」

『・・・やだこの人!!!ひらがな萌えがない!!!』

「また何言ってるの？」

『そっちこそ何やっちゃっててくれてんですか！！カタカナ読みをひらがなに直すのなんて萌えの王道なのに！！』

「わかんないこと言っていると斬っちゃうよ」

『ごめんなさい』

冷凍ビームのごとく、くりだされた眼差しに私の心は折れっちゃんっぞっぞっ♪

「ところでそう言う言葉ってどこで習ったの？」

『ん？・・・え・・・えっと・・・それは・・・』

こういうときはあれよ！！あれを使うのよ暁！！

両手の指を少し複雑に絡めていく・・・っと

『バルカン星人！！・・・あれっバルタン星人だっけ？』

「知らないよ。」

ガラっ・・・

「ちょっといいかい、みんな」

源さんが広間に入ってくる

・・・きたっ！

「おやつ？ 暁君どこへ行くんだい？」

『少し旅に出てきます。話は続けてください』

するすると源さんの隣をすり抜けて、広間を出て行く。  
今後のために色々準備しなくては！！

☆☆☆☆

水筒の中にはお茶を入れて部屋に置き

次は冷やした手ぬぐいを持って広間に戻ると、平ちゃんが宙を飛んでいた

「平助君！！」

『ちづるん！！』

平助に駆け寄ったちづるんに、さっきの手ぬぐいを投げ渡す  
するとちづるんは理解してくれたみたいで、手ぬぐいを平ちゃんの  
頬にあてた。

すると、どうしたことだろう！！緊迫したこの空気のなかであそこだけキラキラと輝いて見えるのは私だけであろうか！！

そんな感じで、シリアスな雰囲気をもとめせず平千の様子を見守っている

気分は中学生カップルの親みたいなの？

・・・けどそろそろちづるんをこの広間から出さないと・・・

「新撰組っていうのはね、可哀想な子たちのことなんだよ。」

「えっ・・・？」

『ちづるん、今日はもう部屋に戻ろう。ご馳走様でした。』

手を無理やり引っ張って立たせるとそのまま広間を後にする。

一瞬、はーさんと目があつた気がしたけど、そのまま逸らして出て行く。

まだこのときは、知らなくていいことだ。

☆☆☆☆

「ねえ暁、新撰組ってどういうことなのかな？」

『さあねえ？　けどあの様子から、むやみに聞かないほうが得策だ  
と思うよ』

ここは自室すでに寝巻きに着替えて、私はちづるんの髪を梳かして  
いる

「で、でも・・・」

『はいちづるん。このお茶飲んでいったん落ち着こうか』

水筒に準備してあったお茶を手渡して飲ませる。

『どう？　少しは落ち着いた？』

「・・・うん・・・あ・・・れ？・・・なん・・・か・・・眠く・・・」

『・・・きつと疲れがでたんだよ。今日は休みな』

「わ・・・かつ・・・た・・・おや・・・」

パタツと音を立てて倒れたちづるんに布団を被せる。

『・・・ごめんね。ちづるん。・・・けど私にもやらなければなら  
ないことがあるの』

寝巻きから、用意した着物へ着替えていく

懐には短剣、刀は小豆こまめにくくりつける

『さあ、行こう・・・私の目的のために・・・』

## 「今日の反省」

☆お茶に睡眠薬入れちゃいました☆

**山茶花** \*そして私は、ごはんを食べました\* (後書き)

なんか・・・シリアス？

あれゝこんなつもりじゃなかったんだけどな・・・  
次回、できれば演歌歌手を登場させたいと思います。

**牡丹 \*そして私は、演歌歌手と会いました\* (前書き)**

長らくおまたせいたしましたっ!!

これからも忘れられた頃に更新すると思います!  
できるかぎりそんなことがないようがんばりますっ!



牡丹 ＊そして私は、演歌歌手と会いました＊

二人の男が、灯りもなしに道を歩いていく。

二人の腰には、刀が差してあり、身なりからは浪士と推測できる。

しかし、話される言葉は、所々聞きなれない言葉が入り、普通の浪士ではないと感じさせる・・・

☆☆☆☆

「やっぱり、シャバの空気はいいな」

「ああ、抜け道から外へでた世界が江戸なのには驚いたが、暮らしてみたら案外快適だし、俺らは未来のことを知っている・・・。ようするに・・・」

くぎった男の言葉を、もらいうけてもう一人が続ける。

「これから勢力を強めていく、長州や薩摩の奴らを利用すれば俺らが天下をとれるってわけよ。」

「そのために今は、長州に属しているんだからな・・・」

「ヒヒヒッ。うまくいけば歴史に名を残せるかもな。・・・・・・・・・・ん？おい女。こんな夜更けにどこへ行く。」

男が声をかけたのは、向かい側から歩いてきた、血のように真紅色の着物を着た娘。

声をかけられた娘は、ビクツと体を振るわせた後、俯かせていた顔をゆっくりと上げ、声を返した。

「は、はい。わたしはこれから急ぎの用である方に会いに行くところでございます。」

くつきりとした二重が目立ち、まだかすかに幼さが残っている。

「おい娘。そんな用より俺達に酌をしろ。俺らはこれから天下をとる男たちだ。今宵、ついてこなければ、一生後悔するぞ。」

1人の男が話しかけニヤニヤと笑いながら、舐め回すように、娘を見た後、娘の手を引っ張った。

「・・・っ！」

男は大胆にも腰に腕を回し、遠慮なく体を触ってくる。

「いい体つきをしてるじゃねえか・・・。こりゃ、酌だけじゃあもつたいねえなあ」

「や、やめてください・・・っ！」

抵抗するも女の力では、腕から逃れることができない。

もう一人の男が声をかける

「おい、いいかげんにしとけよ。竣<sup>しゅん</sup>……楽しみはとっておくもんだぞ。」

「…そうだな。おい娘、名はなんと言う?」

「………。」

「言え。おまえも痛い思いはしたくねえだろ?」

いやらしく笑っていた顔が反転し、凄みをきかせた絶対的有利な立場から命令する。

瞬間的に、いっそう恐怖が濃くなり口を動かす。

「……恭子……です……。」

「恭子と言うのか。俺の名前は亮太。そこにいるのが、竣。これから仕える主の名だ。しっかりと覚えておけ。」

「…亮太様と……竣様……。」

二人の名をつぶやいた娘の口角がキュッとあがった。

『……ビンゴ……!』

「……はっ?おまえ、どうして……。」

“英語を知ってるんだよ”

ドサッ・・・！！、重いものが倒れる音が繋ぐ言葉をかわりに消し去った。

「えっ・・・？」

竣と名乗った男は、自分が見ている色に吐き気を覚えた。

あたり一面に広がるのは、闇にもまぎれぬ、紅い紅い液体

その中心で、先ほどまで非力だった少女が、左手には短剣、右手には第三者の腕うでを持ってコロコロと笑っている。

『ああっ・・・あんまりにもいやらしい手つきだったから、切り落としちゃったっ！』

『大丈夫よ。切り落とした後、すぐに心臓へ短剣を突いたから、あんまり苦しんでないと思うわ』

鉄のにおいがどんどん強くなり、抑えきれなくなった衝動が胃の中のものを外へと吐き出させた

「うう・・・！！・・・はあ・・・はあ・・・」

『あらあら・・・ごめんなさい？気分を悪くさせたみたいね。』

わざと血を大量に出す刺しかたをしたのは秘密

「きさま・・・なにものだ・・・！！」

『わたし？そうねえ・・・、わたしは、ある人に雇われてる人間よ。』

「言えっ！！だれに雇われているっ！！長州かつ！？」

笑っていた顔を引っ込め、腕を捨て、かわりに人差し指を上へと向けた。

『ちがう。もっと上の人・・・。あなたもすぐに会えるわ。』

「何を言って・・・」

『さあ。そろそろ終わりにしましょう。・・・あなたたちを騙すのは、なかなか大変だったよ？』

再び、顔が笑顔になり短剣を男に向けた。

「お、おい・・・！やめてくれ・・・！！」

もうプライドも捨てた男は、四つん這いで必死に逃げようとする。

『ダメだよ逃げちゃ・・・潔く罪を認めて罰を受けなさい・・・』

ドスっ！！

背中から心臓を一突き、こっちはきれいな死に方・・・

『・・・・・・・・そこにいるのはだあれ？』

せっかく任務終了だと思ったのにやんなっちゃう！  
さっきから、誰かが物陰から様子をうかがってるうゝゝ！！

ストーカーよ！ストーカーに間違いないわっ！！

「ほお・・・・・・・・いつから気がついていた・・・・・・・・」

・・・えっ!! うそっ!! ま、まさかこの声って・・・!!  
津田ボイス＋ストーカーって言ったらこのお方しかおりませんじゃないかいっ!!

くるっと後ろを振り返ると、予想道理の人物たちが立っていた

『きゅーちゃんっ!! きょんきょんっ!! ちー様っ!!』

やべえっこの世界へ来たからには、どうしても会いたかったんだよ  
おっ!!

ドサクサにまぎれて、走り抱きつき。

あ・・・いっとくけど、ちー様じゃないからねっ!!

あたしだって命は惜しいからっ! そんな自ら殺されるようなことは  
しませんぜっ!!

と、いうことで紳士さNO. 1のきゅーちゃんこと、天霧さんに抱  
きつきNOW

「・・・貴様、なんだその呼び名は? なぜ俺達のことを知っている。

」

きゅーちゃんにくつついていると、隣から不機嫌な声が聞こえてきた

『ん? あだな? それは匡だから、きょんきょんでく九寿だから、き

ゆーちゃんです……千景だから、ちー様』

ひいっ!!ちー様の背後からどす黒いものがっ!!

だから、1回ちー様んとこで、言いよどんだのにっ!!

けど、ここで退くわけにもいかないっ!!

わたしの目標は、薄桜鬼の世界であだなコンプリートだからっ!!

「おい。あんまり風間を怒らすなよ?後がメンドイんだからな」

そう声をかけてきたのは、鉄砲青年もといきよんきよん

『きよんきよん……!で、でもあたしにはあだなコンプの夢が・・  
・!』

「もう一つの質問にも答えろ。それからここで何をしていた?」

またしても不機嫌ボイスに話をもどされた  
んもうっ!もうちょっとおしゃべりしたかったのにっ!

あれっ?けどなんて答えよう?話しちゃっていいのかな?

・・・・・。

まあ、ちー様たちならいっか!

あたしの直感が否定しないのだから、大丈夫!



『んとね〜。まあ見ててけろ』

ピーッ

指笛を鳴らすと、あたしの相棒が駆け寄ってきてくれた。

『お待ちせ、小豆<sup>こまめ</sup>』

小豆にくっつけておいた刀をとって、さっき殺<sup>や</sup>ったばかりの死体に近づき、刀で死体に傷をつける・・・すると、死体が握り拳ぐらいの光る玉になって空へと上がっていった。

もうひとつの死体にも同じことをする

「これは・・・いったいどういうことですか？」

「貴様は普通の人間ではないな？」

『ちー様正解。簡単に言えば、普通の人間じゃないから3人のことを知っていて、あたしの正体は死神ってところかな？』

「おいおいマジかよ」

『本当だよ？現にさっき魂を送ったでしょ？それにこの刀は特殊で、ある特定の人しか送ることが出来ないの。だから普通に斬って殺すことはできても魂にして送ることができるのは、脱走者だけなんだよね。』

「脱走者とは、どういう意味ですか？」

『ああ、脱走者っていうのは“地獄”から逃げた人。わたしはある人っていうか、神様から命令されてこの世に逃げてきた人達をもどしているんだよ』

『この世に“鬼”もいるんだから、死神がいたっておかしくないでしょ？』

だまって聞いていたちー様の眉間に、しわが少しよった

「・・・貴様、鬼を知っているのか？」

『ええ。もちろん。あなたは西国の鬼の頭領で現在、薩摩藩に属しているっていうことであってる？』

あらっなんかブスツとしちゃった・・・。

・・・かわいい・・・！かわいいよ、ちーさまっ！！

なんとなくいけそうな気がしたので、今度はぎゅっと、ちー様に抱きついてみた

ちー様は抱き返すことも殺すこともなかった

『そろそろ時間だから帰らなきゃいけない・・・今度は・・・』

今日会えたのは、偶然、だから本来ちー様との初接触は・・・。

『池田屋……。こんど会えるのは池田屋だね……。』

ちずるんの運命の選択と、新選組の歴史、

「なぜそんなことがわかる？」

『いったでしょ？ 死神なんだから先読みの力ぐらいならあるの！。・それじゃあ、またね！！今度はゆっくり話することができないかもしれないけど、元気でねっ！』

ちー様から離れて、刀を小豆にくくりつけて、後ろ向きに歩きながら手をふった。

ちー様は、腕をくんだまんまだったけど、きょんきょんときゅーちゃんは手を振ってくれたよ

あっ、そういえば……。

結構離れてしまったから、手をメガホンにして伝える。

『言うの忘れてたんだけど、今日話したことは4人の秘密だよ！それからあたしの名前っ！！恭子じゃなくて“暁”って言うの！！』

鬼の聴力がいかほどのものかは知らないが、けっこう大きな声で言ったから伝わるだろう。

言いたいことは、言ったから満足。満足。と思って前を向いて歩こうとしたら・・・

「暁」

な、なんとちー様が呼んでくれたっ!!

嬉しさに後ろを向くと、離れていたちー様がほんのちょっとしか離れていない距離にいた

えっこれって鬼の力？

「犬には、気をつけろ」

『えっ？』

“ どういうこと？ ”

聞き返す間もなくちー様の姿は消えてしまった。

『犬？小豆のこと・・・？』

犬の正体に気づくのは、もう少し後のこと・・・

☆☆☆☆

「珍しいもん見ちゃったな。風間が素直に抱かれるなんて」

「ふん。・・・ただの気まぐれにすぎん。・・・ただ・・・」

“ こんど会うときは池田屋だね ”

ただすこし、死神という存在に興味を持った

「天霧。暁のことを少し調べておけ」

「わかりました」

次会うときは、池田屋・・・

「さて、どうあらわれる・・・死神の女よ・・・」

**あじさい    \*そして私は、告白しました\* (前書き)**

今日は後書きにお知らせがあります。

あじさい \*そして私は、告白しました\*

クエスチョンッ!!

今日は、何の日でしょう？

A. 土方さん達が帰ってくる日っ!!

☆☆☆☆

ぞろぞろと集まっている人だかりを潜り抜けてある方に近づく

『山南さんっ!! お帰りなさいっ!!』

時は大阪出張後。

そんな山南さんに話しかける私は勇者だと思う。だれかつ!! だれかほめてっ!!

「暁君。君は身分をわきまえているんですか？あなたは居候の身。何も出来ないのに屯所内をうろつくなんて、迷惑にしかないでしょう。なにも出来ないのであれば部屋で大人しくしているのが普通だとおもいませんか？それともあなたには、普通が通じないので

すか？」

・ ・ ・ ・ ・ あかん ・ ・ ・ あかんよ ・ ・ ・ 。

あたしが甘く見てたよ。 ・ ・ ・ 山南さん、めっちゃ怖

いよーーーっ！！！！

ヘルプっ！！ ヘルペスミーっ！！

私のガラスのハートが――っ！ハートが粉々に砕けてしまう――  
――っ！

『あは．．．あはは．．．大人しく部屋に戻ります．．．』

私の顔は笑えているだろうか？ いや、ひきつっている。こうしてドキッ！？ ☆第1回腹黒本性を出した山南さんと仲良くなるう大会！ ☆はあっけなく幕を閉じてしまった。

ちなみに参加者募集中。

★★★★

「副長。例の件、調べ終わりました。」

音もなく開いた襖から黒装束もとい、山崎丞が現れた

「そうか。どうだった」



「身元は敵の藩でも一般人でもありませんでした。しかし泳がせてみたところ逃走。後を追いました所、長州浪士と接触。」

「長州浪士と接触？あいつはやっぱり間者だったのか？」

聞いただしたところ、山崎の口調がしどろもどろになった。

「いえ・・・それが、様子を見ていたところ浪士は斬られて・・・その・・・消えた・・・というか・・・」

「・・・どうゆうことだ」

「正確には刀で死体を斬ったところ、光る魂たまになって空へ昇っていききました。」

「あいつは何者なんだ・・・」

「そこまで詳しくは分かりませんが、その後新しい浪士が現れ引き続き観察していたところ、彼女は自らを死神と名乗り、神様のつかいでやってきたと・・・」

副長の眉間のしわが一段と濃くなる。

「あいつは頭がいかれてんのか？」

「しかし、普通ならありえないことをやったところを見るとあながち間違いないかもしれません。」

「・・・わかった。後のことは俺にまかせてくれ。ごくろうだった。」

「はっ」

山崎が出て行ったのを確認してから、首を回して茶を飲みながら、報告書に目を通す。

「・・・一体、どうなってんだ・・・」

『・・・へー、犬って山崎さんのことだったんだ。』

「っ!」

顔をあげると障子には黒い影が映し出されている。

『ふくちよー、せっかくなんでお話ししませんか？入ってもいいですか？』

「俺もちょうどお前に聞かなきゃならねえことがある・・・入れ」

『しつれーします。うわっホントに書類だらけだ。ちゃんと整理したほうがいいですよ?』

「あいにく帰ってきたとたん厄介事を持ち込まれたからな」

『それはそれは……。』

よっこいせと副長の前に正座をする。

「まず、なんでお前は俺の部屋の前にいた？」

『さっき山南さんに会いに行って、戻ってきたときに死神とか神様って単語が聞こえてきたから、ちよこつと寄らせていただこうかなって思っただんです。』

本当は、怒られてきたけどそんな事言ったら、ぜってーバカにされる恥ずかしいよ。17にもなって怒られるって……

「俺もそのことでお前を呼ぼうと思っていた。……てめーは何者なにもんだ」

嘘をついても騙せない瞳

それに、このまま隠し通していくより活動しやすくなるか……

『いいですよ。お話ししましょう。少し長くなるけどいいですか……？』

☆☆☆☆

『・・・とまあこんな感じで、あたしはここに居るわけです。』

「嘘はついてねえようだが、現実味がねえな」

あたしは全部を話した。

神様のこと、この世界のことを向こうの世界の文献に残っていることなどなど・・・

『今回は特別ですが、あたしはこれ以上この世界の人に正体がバレたくありません。できれば内密にしてもらえませんか？』

「だめだ・・・と言ったら？」

唇を三日月の形にして言う。

『あたしは情報を知った者をどこまでも追いかけて殺しましょう。ああ・・・新選組は特別に知っても知らなくても皆殺しにしてあげましょう。元凶ですからね。組長達は、少しは持ちこたえてくれるかもしれないが、平隊士は、簡単・・・。あたしはこの世界がどうなるうとかまわない。だからあたしの邪魔をするなら誰であろうと容赦はしない』

笑え。笑っていれば表情が読めなくなる。

「千鶴でもか・・・」

『もちろん。』

情けなんて言葉を気にかけていたら自分が殺される。

たぶん自分と同じような人たちが殺され、戻されたのはすでに広ま  
っているだろう。

向こうが自分を護るために殺す気ならば、あたしはそれ以上の力と  
気でねじ伏せよう。

「・・・わかった。おまえが組織の邪魔にならない内は内密にして  
やる。」

『ありがとうございます。』

「ただし・・・！出かける時は必ず俺の許可をとってから行け。そ  
れからもし外出中、敵に新選組内の情報を流したら俺らも全力でて  
めーを殺してやる」

脅迫した者を脅迫する。

本当、鬼の副長あつての新選組だ。

『あら恐いことだ。せいぜい殺されないように気をつけましょう。  
・・・それじゃああたしは部屋に帰らせていただきますかねえ』

するっと立って副長に背をむける

障子を半分開けたところで、再び首だけ副長にむけた。

『そうだ。黙っていてくれるお礼に少し教えてあげましょう。枳屋ってお店があるでしょう。そこを調べてみると面白いことがありますよ。』

それだけ言うとともに部屋から出て行ってしまった。

「副長、出張おつかれさまでした。お茶を持ってまいりました。」

暁と入れ違いに斉藤がお茶と茶菓子のをせて入って来た。

「おお、ありがとな。」

お茶を受け取りする。

「さきほど副長の部屋から暁が出てきましたが、なにかあったのですか？」

「・・・いや・・・なんにもねえよ。」

「そうですか。それでは失礼します。」

部屋を出ようとした、斉藤を呼びとめ山崎と島田を呼ぶように伝えた。

「．．．すまねえが二人にはこれから榊屋について調べてもらいた  
い」

**あじさい \*そして私は、告白しました\* (後書き)**

ちー様の言ってた犬は、山崎君ってことで・・・

☆それから募集という名のヘルプ☆

これからこのお話は、オリジナル要素も取り入れていきたいなと思っています。

そこでっ!! ○○さんとイチャイチャしてほしい!とか、○○さん落ちにしてほしい!など、読みたいお話や誰落ちにしたいかなどを募集したいと思います。気軽に送ってもらえたら嬉しいですよ。

オリジナルは入れてもちゃんと原作には沿っていきますよー(〓▽

〓)／



**マリーゴールド \*そして私は、2つの物を食べました\* (前書き)**

今回のお話は、お笹様、☆カヲル君を愛してる★様からお助けをいただきました。

本当にありがとうございます。

まだまだ、ネタ募集しておりますので送ってもらえると嬉しいです

マリーゴールド ＊そして私は、2つの物を食べました＊

『うつ・・・ついにきたか・・・』

暁は、自分の両手を胃の辺りにおいて、荒い呼吸を繰り返しながら  
畳へと倒れた。

「ー!?!? 暁というしたの? 大丈夫!?!」

『だ、だいじょうぶ・・・だよ・・・すぐに・・・おさま・・・るから・・・  
』

心配そうに駆け寄った千鶴に、荒い呼吸を混ぜながら伝える。

「ぜんぜん大丈夫じゃないよっ! 待ってて! 誰か呼んで来るから!」

そう言うのと、千鶴は障子を開けっ放しにして人を呼びに言った。

☆☆☆☆

『――で、どうしたんだい。Why?』

ところ変わって場所は、台所

食事を作る時間でもないのに、人の姿はないわけではなく、正しくは、二人と一匹がいる。

一人と一匹は、暁と小豆こまめであり、もう一人はため息をついた。

「雪村から倒れたと聞いて行ってみれば、異常はなく普通に座ってお茶を飲んでるし、倒れた理由を聞けば、糖分が足りなくなり、発作が出たとふざけたことを・・・」

『いや、あたしの場合、本当に発作が出るんだからね？糖分はあたしにとって薬だよっ!』

某SF人情マンガの主人公と同じようなことを言ってみたが、実際こちらに来てから甘い物を食べなかったので、手に入れるため、すこしばかり演技してしまったというわけだ。

＊本当は糖分不足で発作が出て倒れたりなんかしません。

（暁の場合は）

『ってそうじゃなくて!なんでここに、はーさんが居るのかを知りたいんですがっ!』

「副長命令だ。局長から台所の使用許可を得たとはいえ、火事や毒の混入をされるかもしれないからな」

『大丈夫ですっ！毒を混入できるほど器用じゃないっす！』

「自慢できない事を堂々というな」

『いやだってそうなんですもの・・・火事は保障できませんけど。  
——っあ、小豆ごめん。』

長い間、持たせっぱなしだったね。ありがとう。出来上がるまで外で遊んでいていいよ』

小豆こまめの背中にくくり付けてあった荷物をほどき、解放してやる。

『——なんか、こうやってると遊びに行く子供を見送る夫婦の気持ちになりますね』

小豆が勢いよく掛けて行く姿がまさに子供そっくりで・・・

「・・・いつから夫婦になった。」

『着目点、そこですか』

☆

結局、はーさんも手伝ってくれるみたいで、たすき襷素早く取り付けて、手を洗い始めている。

問題は私、超現代っ子でろくに襷も結べず、わたわたししている。

「はぁ・・・」

これで何度か分らないため息をついたはーさんは、あたしの後ろに回ると、素早く取り付けてくれた。

『おおっ！ありがとうございます。はーさんいいお嫁さんになれますよ？』

「俺のことを褒める前に、襷ぐらい結べるようにしてくれ・・・」

私も手を洗って準備完了。いよいよおかしづくりスタート戦闘開始！

☆☆☆☆

『それじゃあ、はーさんは、クリームを作ってもらいます。』

「なんだそれは。」

（あー・・・外来語・・・）

『ーうーんと、なんていったらいいんでしょう？甘くて白い、マヨミたいな・・・あっこれも外来語・・・とにかく、材料は知っているものなので、大丈夫です！』

それ以上の質問を防ぐ為、はーさんにお釜とお箸4本を渡す。

『じゃあ、この中に材料を入れていきますんで、はーさんはひたすら混ぜてください。』

そういうと暁は、  
 どんどんお釜の中に材料を入れていく。

すべての材料を入れ終わったら、はーさんに後を任して、自分の仕事に取り掛かる。

某四次元ポケット所有者であり、実は、地球政略に訪れたかもしれないと噂の方のオープニングを歌いながら生地 of 材料を混ぜ、かまどに火をくべ、その上にひいた鉄板を熱する。

鉄板が温まったら、先ほどの生地を薄く円く何枚も焼いていく。

『はーさん、そっちはどうですか？』

「なぜか、白くふわふわになってしまったのだが・・・」

『大丈夫です。それで合ってます。』

ここからは、夫婦の共同さ……嘘です。

普通に、私が生地を塗り、はーさんが新しい生地を重ねていく。

『……できたっ!』

形は、少し歪な気もするが、手作りだから大目に見てもらう。

「……これは本当に食べられるのか?」

初めてみる物体に少々引き気味だ。

『食材を使ったら、よほどのことをしない限り、食べれますよ。――さあ。広間に持っていつてみんなで食べましょう! 皆にも、甘いにおいが届いているはずです。』

特に筋肉とポニーのところには。

「副長も喜んでくださるといいのだが。」

『味は保障しますよ。――――おっ』

お皿を持ち上げたはーさんの手の甲にクリームがついてしまっている。

「気づかなかった。洗わなければ……」

一度お皿を置いたところを見計らって、素早く手を掴む  
そして・・・

『んっ・・・』

舌で手の甲に舐めた。

「なっ・・・!!」

『やっぱり、味は保障しますよ?』

固まってしまったはーさんはほっとき、自分はさっさとお皿を持つ

『――それじゃお先に。落ち着いたら来てくださいね?』

横を通りすぎたところでピタッと足を止めて、まだ硬直進行形のは  
ーさん顔を向けた。



『やっぱり、はーさんはいいお嫁さんになりますよ』

**マリーゴールド ＊そして私は、2つの物を食べました＊（後書き）**

今回から、タイトルを少し変化させました。

私自身どんなお話だったか、タイトルで思い出せないので・・・

金魚草    \*そして私は、伝わることを願いました\*

罪悪感・・・罪をおかした、悪いことをしたと思う気持ち

☆☆☆☆

『ねえ。質問していい?』

「いいよ。何が聞きたいの?」

だんだんと過ごしやすい気温になってきた、あたしが生きていた時の暦で4月。

池田屋事件まで、もう少しある4月。

あたしとそーちゃんは、縁側に腰をかけて、お茶を飲んでいた。

最近では、お手伝いでなくとも、部屋から出られるようになってきた。

もちろん。幹部の付き添いが必須だが。

『そーちゃんは、人を斬ることに罪悪感を感じたことがある?』

「ないよ。僕は近藤さんのためにやれることをやるだけだから。」

『ーそっか』

「なんで、そんなことを聞いたの？」

『ん？あたしもここに来て、しばらく経つでしょ？

だから何回か斬りあいから帰ってきた隊士も見ることがあるんだけど、どんな気持ちで斬ってるのかわかって。純粹な好奇心だよ。』

「暁は、聞くことが多いよね。」

『そうかもね。それが私だもん』

物事を考えるのは好きだし、その答えが自分の中に浮かぶのはもっと好き。

だから、疑問が浮かんで質問するのは、当然の事だと思っているし、自分が他の人より好奇心が強いのだって自覚してる。

『さて、そろそろお手伝いを再開しなくちゃ。そーちゃんも巡察の時間じゃない？』

ちょうどよく、隊士がこちらに向かってきてそーちゃんに話しかける。

一瞬、こちらにも視線を、というか睨まれたが、そんなのいちいち気にしていたらここで暮らして行けない。

「それじゃあ、僕は行くよ。」

『はい。お気をつけて。』

「君は、人を斬ることについて罪悪感を感じるの・・・？」

沖田さんが湯のみをお盆に戻して去っていく

去りぎわに言ったこと・・・私は・・・私は・・・わからない・・・

『。。。それじゃあ、あたしも再開しますか』

☆☆☆☆

1つ分かったことがある。

それは、刀の鞘についての仕組みだ。

鞘に描かれていた、大量の華の模様

その華の一つ一つが、脱走者の印みたいなものだということだ。

簡単に言えば、あたしが脱走者を神様のところに戻すと、その戻した人数分、模様だけだった華に色がつくと言うことだ。

後何人いるのかわかる分助かるが、残りの人数にも嫌気が差す。

そんなこんなで、ちよくちよく指令の紙を送られてきたら、副長に許可をもらう、そして斬り合って魂を戻すと言うことをもう何回かやっている。

『まさか、毎回討伐に山崎さんが同行するとは思わなかったけどね』

「まだ、長州藩士の可能性が完全に消えたわけでは無いのですから、当たり前でしょう。」

『あたしは、どこの藩士にもなった事無いから、情報なんて出てきませんよー。』

あっ・・・ここだ』

立ち止まったのは、1つの民家

送られてきた紙には、ここの地図と今回は、8時くらいに一度訪ねてみるという、今までに無い内容の手紙だった。

『手紙にも書いてあることだし、1回訪ねてみよう。』

――

――こんばんは！』

数秒待つと、まだ首のすわっていない赤ん坊を抱いた、若い女が出てきた。

「どちらさまでしょうか？」

『わたくしなかやましゅうへい』

『私、中山修平の知り合いの者なのですが、こちらに居るとお聞きして訪ねてきたのですが、ご在宅でしょうか？』

出来る限り丁寧な言葉で、話していく。

・・・隣で山崎さんが驚いた顔をしているがねっ！

「すみません。まだ主人は飲み屋から帰ってきてないんですよ。」

『えっ・・・主人・・・？』

おかしい。

「はい。お恥ずかしい話なんですが、私の元旦那がこの子がお腹に  
いると分かった途端、消えてしましまして、途方に暮れていた所、  
修平さんと出会ったんです。彼は、私の事情を知ると助けてくれて  
・・・つい最近、夫婦の契りを結んだばかりなんです。」

頬を赤らめながら、話す彼女はとても幸せそうで・・・

ああ。そういう事か・・・。

『そうだったんですか。おめでとうございます。それならまた改め  
させてもらいますね』

「すみません」

ぺこりとお辞儀をして去っていく姿を彼女は最後まで見届けてから、  
家の中へと戻っていった。

『あーあ・・・もう、やんなっちゃう・・・どうしてこうなるのか  
な・・・』

こちらの世界で、奥さんと子供を持ってしまった男を斬らなければならない。

いままで斬ってきた奴らは、浪士や盗賊やらまともな奴なんて一人もいなかった。

だから、殺せた。この世界にも未練なんかない奴らなんだから。

「どうするのですか？」

『とりあえず。飲み屋から帰ってくるのを待とう。』

自分の使命は、神様のもとに戻ること

彼の使命は家族を護ること

いったいどっち使命が、大切なんだろう……

☆☆☆☆

「……さん……………暁さん」

肩を揺らされて気づいた。少し眠ってしまったようだ。

「誰かこちらに來ています。例の人じゃないでしょうか」



前方を見ると、酒に強いのかあまり飲まなかったのか、30代ぐらいの男が確かな足取りでこちらに向かってきている。

『ごめん。山崎さんはさがっていてね』

山崎さんが屋根の上のったのを見届けてから、話しかける。

『……すみません。あなたの名前は中村修平さんですか？』

「はい。そうですけど……どちらさまでしょうか？」

『……あなたを』

『神様のもとへ返しに来た者です。』

彼は、私の言った言葉を理解すると、小さな声で 分かりましたと言った。

「俺は、ある事件が原因で前の世界では妻と子供を殺してしまったんです。だからもう一度、愛することが出来た人と暮らしたかったなっと思うて脱走なんかしてしまいました。・・・ごめんなさい。こんな若い子にする話じゃないですよね。」

『いいえ。実はさっき奥さんとお子さんに会いました。きっとあなたの愛情は、奥さんや赤ちゃんに伝わっていますよ。・・・だから脱走者としてではなくて、前の世界の奥さんと子供さん。この世界の奥さんと赤ちゃんの為に、とお父さんとして罪を償って、もう一度愛する為に、生まれ変わってください・・・』

言ってることは、少しめっちゃくちやだったかもしれない。でも彼は微笑んでくれて、

「・・・少し、書き残しをしていいですか？」

『はい』

書くものを持っていなかった彼に、メモ帳とボールペンを渡すと懐かしそうに眺めた後、

さらさらと書いて、渡した。

「これを。後で2人に渡してもらえますか？」

『必ず。』

最後の命が消える瞬間まで彼は、しっかりとお父さんの顔だった

☆☆☆☆

あれから数日、あたし達はまた二人で縁側にいた。

『そーちゃん。前そーちゃん言ったよね。君には、人を斬る罪悪感はあるかって』

「うん。聞いたね」

『わたしもね。罪悪感は無いかもしんない。でもね……悲しさはあると思うんだ。』

「悲しさ？」

『うん。悲しさ。』

あの後、私は眠った奥さんの枕元に手紙と少しだけお金置いてきた。

彼に罪があったとはいえ、彼をこの世界から消したのは、私だから。

手紙には、たった2文だけだったけど、伝わる彼の想い、愛情、希望……

も再び」

「ずっと愛し続けるから。来世で

私には、来世なんてあるのか分からないし、神様がまた巡り合わせ  
てくれるとも限らない。

だから思ってしまう。もし、あたしが神様のもとに還さなかったら・  
・

願ってしまう。来世でも、会えるように・・・

『・・・斬られた人のことを、いったいどれだけの人が悲しむんで  
しょうね』

「さあね。でも誰も悲しまないってことはないんじゃない？」

『そう・・・ですね・・・あたしはそれを信じます。』

立て掛けておいた刀に手を伸ばし、彼の印だった黄色の金魚草の花  
をなぞる。

大丈夫。彼はきつと罪を償うだろう。

『・・・さて。あたしはそろそろ失礼しますね。』

ちづるんと合流して、掃除の刻だ。

「ちょっと待って。僕も質問したいことがあるんだけどいい？」

『どうしたんですか？めずらしい。どうぞ。』

「君は時々屯所を抜け出して、何をやっているの？」

百合 ＊そして私は、しがみつきました＊

ワン！

「入れ」

時々、犬じゃないのではないのかと思うぐらいの礼儀正しさがある。  
土方は入ってきた小豆<sup>こまめ</sup>から開けられてない手紙を受け取り、斜め読みをする。

「今日もか・・・ここ毎晩すぎねえか。」

きゅん

小豆も同意するように、か細く鳴く

「・・・ご苦労だったな。この手紙は暁に渡していいぞ」

手紙を元の状態にして渡す

小豆は、受け取るとしっかり障子を閉めてから、出て行く



「はあ・・・あいつ寝てやがんのか？」

☆☆☆☆

『・・・』

これでもバレないように。

特にそーちゃんには、最新の注意を払ってきたというのに！

何がだ！！何が原因だっ！！

はっ！もしやあやつは、魔法使い！？マジカル沖田かつ！？

もう心の中では、爆破寸前のダイナマイトを抱えてる並に思考がぶっ飛んでいる。

「なに黙ってるの？」「僕知ってるよ？君が夜中にこそこそ山崎くんと抜け出してるの」

『見まっがいじゃね？』

「動揺して、変な口調になってる人に言われたくないね」

『ちげーし！もともとこういう喋り方だす！！』

やべ・・・また囁んじまった・・・

えっ？もうネタバレ？早すぎじゃない？もうちょっと引き伸ばすとか出来たんじゃね？

「ーーおい。二人して固まって何やってんだ？」

『救世主！！』

廊下から声をかけられた

なんと九死に一生を恵んでくださったのは、平ちゃんだった。

「平助。間が悪過ぎ。」

「な、なんだよ。俺なんかしちまったか？」

いえいえ。あなたは素晴らしいフォローをしてくれました。

そりゃあもう副ちょー並に！

『そっちこそどうしたの？もしかして逢引ですか？このやろー』

最初は平助に隠れて気づかなかったが、後ろに千鶴もいた

「ち、ちげーし！！土方さんに呼ばれたんだよ！」

若干、顔を赤くしながら答える

「実は、沖田さんも呼ばれてー」  
『マジか！』

ちづるんの言葉を遮ってしまって申し訳ないが、今日はことごとくあたしに運が向いている

『ほら。そーちゃん、副ちょーが呼んでるって！早く行ってきなさい！』

暁は、沖田を素早く立たせて、平助のほうへ押しやる

「ーーー後で覚えておきなよ」

副ちょーに呼ばれた＋脱走の理由が聞けなかったことで黒い笑みが

こぼれている。

「暁、ごめんね。掃除最初から一緒に出来なくて」

『ううん。気にしないで。ほら、呼ばれてんでしょ？早く行つてきな。いいことがあるよ』

「暁は知ってるの？」

『ううん。でも今はあたしに運が向いてるからね』

「？」

本当になにもなく、しいていうなら、暁の第六感的感想だ。

暁の言葉に千鶴は、顔に疑問符をいっぱいにさせている。

が、ここに留まっているわけにも行かず、三人は行ってしまった。

三人と入れ替わるように、小豆がやってきた

『げっ・・・またかよ。ホント人使い荒いなあー』

「本日、夜中なのは確かだが、詳しい時刻は不明」

「対象人数は六人。写真いつもどおり同封しておく。」

「場所は、池田屋より南西へ2km付近」

『へー今度は池田屋の近くなんだ・・・ん？池田屋？・・・  
・。ちづるんと平ちゃんとそーちゃん・・・。 つ！あゝゝ  
ゝゝゝっ！！』

庭の木にいた鳥達が慌てて枝から離れてゆく  
第六感があたった

「何事ですか」

近くの障子が開き、山南さんが姿を現す。

暁は、シヨックのあまり山南さんがいること気づかない

『ああそうだったか・・・もう・・・はい・・・うん。いや待て！  
まだ、まだ諦めるのは早い！そうだよっ！私は両方行動するんだ！』

「なにが両方行動するのですか？」

『ううおっ山南さん！いつからそこに！もしや忍者！？』

「話しかけたのに、暁くんが気がつかないただけです」

『うわっマジっすか。せつかく話しかけて頂いたのにサーセン。ち  
よっとあたし用事が出来たので、失礼しますね』

ある意味、掃除より大切な仕事が入ってしまった。  
ひょいっと庭から、駆け足で廊下を駆け抜けていく

「待ちなさい。暁くん。いったい何が・・・はあ、もう行ってしまいましたか」

☆☆☆☆

『大丈夫？手ぬぐい持った？小太刀はしっかり差してる？間違えてない？』

門の前で、行われるやり取りに隊士たちは脱力する。  
一様に頭の中では、おまえはオカンか。とツツコミが入れられている

「そんなに心配なさらなくても大丈夫ですよ。」

さすがの千鶴も苦笑顔くしやうがおである

『大丈夫って言ってる人ほど危ないの。沖田組長の言うことやることには、注意を払っていてね。絶対だよ。』

「はい」

『よし。いい返事！・・・それじゃあ沖田組長、ちづるんのことお願ひします。』

「わかってるよ。こうしてると二人は親子みたいだね」

『それは聞き捨てなりませんね。こんな可愛い息子がいたら嬉しいですけど、せめて弟にしてください。切実に。』

真顔で訴える暁に二人は笑ってしまう。

「それじゃあ行ってくるよ」

「行ってきます」

『はい。気をつけてね。』

見送る彼女の姿が見えなくなると、先ほど土方さんの前で聞けなかったことを聞いてみる

「あの、沖田さん。暁には外出許可が出されないんですか？」

「ああ、暁はまだ見たいだね。彼女は君みたいに外に出なきゃいけない事情も無いわけだし」

「でもそれじゃあ、ずっと屯所に籠もったままなんて可哀想じゃあ

りませんか」

「・・・そんなことはないと思うよ。君よりずっと楽しんでるんじゃないかな」

今まで目撃した脱走が正しければ

☆☆☆☆

ちづるんが、巡察に同行すると選択したから出来る限りの注意はしたのだが、こんなイレギュラーのちょっとしたことで物語は変わるはずもなく、古高は捕縛。土方さんの拷問や山南さんの説教も終わり、

現在、新選組は討ち入りの準備真っ只中である

一人頼りなさそうにしているちづるんには申し訳ないけれど、こちらも今回は仕事が二重三重に重なっていて忙しい

『副ちよー、ちょびつといいつすか?』

「なんだ。忙しいんだ早くしろ」

『あたしを隊士として池田屋の編成に組み込んでももらえませんかね』

「はあっ!?!」



『いえですから・・・』

「馬鹿も休み休み言え。邪魔だどつと失せろ。それにお前は、『あれ』も今夜あんだろうが」

他のところに指示を出そう歩き出す土方の腕にしがみつく

『いやこれマジなんですって！「あれ」のことなら大丈夫っす！どうにか出来そうなんでお願ひします！ぜひ池田屋編成に入れてくださああい！！』

しがみついてブラブラと足は宙に浮いてしまっている情けない頼み方だが、こちとら手段選んでいられねーんすよ！

・・・つか地味にスゲーな副ちょー

「いいんじゃないですか。連れて行っても」

『悪役から救世主ーっ！！』

後ろから抱きかかえて離されながら、まさかの仲介を買って出たのはそーちゃんだった。

「どちらかに連れて行けば少なくとも長州藩士かは分かるし、この子が長州藩士なら、僕がばっさり切り捨ててあげますよ。」

『やっぱり悪役ーっ!!』

本人の目の前で、切り捨てるとか普通言う!?

・・・いや、そーちゃんなら言うわ

「たしかに総司の言うことも一理あるか」

この人はまだ、私がどこかの藩士ではないかと疑っている。

『そーそー。敵に殺<sup>や</sup>られるにしても、そーちゃんに切り捨てられるにしても、新選組は一利あって百害無しなんですから。ーーーーーそれに』

『・・・ちずるんばかりみんなと外に出られてズルい』

目線の先には、局ちょーとちづるんがいて。

・・・。

「ぷっ・・・あははははははっ!」

『わ、笑うなー！』

よほどツボにはまったのか、暁を降ろして、腹を抱えて笑う、笑う

「はぁ・・・もう勝手にしろ。そのかわり責任は総司に一任するかな」

出会ってまだそんな経たないのに、あたしは何回副ちょーのため息を聞いたっけ？  
それより

『本当！？やったぜ！ありがとう副ちょー！よろしくねそーちゃん！』

そーちゃんはまだ笑っていたけど、こちらを向いてさらに笑った

「おっ暁も近藤さんの組についていくのか？」

『あっ左之にいい！やったよ！土方さんに勝ったよ』

もう開き直って、小さい子みたいに原田に抱きつく

「俺としちゃあ、戦場いくさばに女子供を連れて行くのは良いとは思えねえが、本命は四国屋だっって言われてるし大丈夫だろ。・・・ところで暁は剣、やれんのか？」

『もちろん！死なない程度にはね！』

「そうか。そんじゃ今度稽古つけてやるよ」

『やった！嬉しい！――あっ！はーさん聞いて今度、左之さんに・  
・・』

り5秒

副ちよーの雷が落ちるまで残

百合 ＊そして私は、しがみつきました＊（後書き）

最近書いていて、小豆<sup>あずき</sup>を「こめま」と読み書きすることに、若干めんどくささが出てきました。

小豆の初期設定として、本当は、もっと大型動物で「虎徹」という名前にしようとしていたのですが、そいやー虎徹って近藤さんの愛刀だし、大型動物そこらへんに野放しにしてたらイカンくね？とか思って、犬＋小豆になりました。

そんなこんなの裏のお話

桔梗 \*そして私は、突入しました\*

「ねえ。この前の話の続きなんだけど・・・」

『ーいま話すことかい?』

場所は、池田屋前

まだ土方さんたち援軍はおろか、会津藩や所司代の役人すら姿を見  
せていない

暁の頭には、アニメの表現ほどではないがそれなりに触<sup>ふ</sup>れば確認で  
きるたんこぶを携えていて

先ほど土方に殴られた頭をさすりながら、少々めんどくさそうに沖  
田に顔を向ける。

「うん。だってこのまま気になって、浪士に斬られちゃったら暁は  
どう責任取ってくれるの?」

こてつと顔を傾けながら問うてくる

『斬られるつもりなんてないでしょ？』

あたしが言うのと、まあね、と笑いながら返した

『わお。すごい自信だね、じゃあこうしよう？もしそーちゃんが今回の捕り物で、傷一つしなかったら、何でも質問に答えてあげる。でも、もしものことがあったら、ある時が来るまで待ってくれる？』

我ながらズルい  
この物語の中で、どうなるか知っていてそれで提案いるのだから。  
それなら・・・

『まあーけど安心して。前にも言ったけど、あたしは近藤さんの邪魔になっていないし、これからなるつもり無いから。』

これだけは再度言っておこう

☆☆☆☆

そんな会話から長いことが経った亥の刻

「・・・さすがに、これはちょっと遅すぎるな」

ぱっさんが、すこし不満そうな声でつぶやいた

「近藤さん、どうします？これでみすみす逃しちゃったら無様ですよ？」

それまで沈黙していた局ちょーが不意に立ち上がると、あたしとちづるんの肩に手を置いた

「雪村君と暁君は少し池田屋から離れていてもらえるか  
ここは危険だ。浪士が下りてくるかもしれん。・・・もつとも、  
逃がすつもりは無いがな」

そういうと視線を前に向けて池田屋へ踏み入っていった

「会津中将お預かり浪士隊、新選組。――詮議のため、宿内を改める！」

中から、小さな悲鳴が聞こえてきた

「わざわざ大声で討ち入りを知らせちゃうとか、すぐく近藤さんらしいよね」

「いいじゃねえの？・・・・・・正々堂々名乗りを上げる。それが、



討ち入りの定石ってもんだ」

「自分をわざわざ不利な状況に追い込むのが、新八つつあんの言う定石？」

近藤さんに続き、沖田、新八、平助も次々に池田屋へ踏み込んでいく

「御用改めである！手向かいすれば、容赦なく切り捨てる！」

――激戦が始まった

――池田屋の中から、絶え間ない怒号が聞こえてくる

――階段を駆け上がる音。断末魔。

――そして――

「大丈夫か、総司！？」

近藤の叫ぶ声がに続き

「くそっ！死ぬなよ、平助！！」

新八の声も中から聞こえてくる

「……っ！！」

ちづるんがあたしの目に視線を向けてきた

やはり、イレギュラーの存在だけではそこまで物語が変わることなく、予定通りの人が危険な状態になっていくか。

暁は刀の柄つかに手をかけると、目線を池田屋に向けたまま

『いい？ちづるんよく聞いて・・・今の声を聞いている状況から、平ちゃんとそーちゃんの所へ向かわなければならぬ。まず私は先に平助の所までちづるんに出来る限り安全な道を作ってくるから、私が合図したら平ちゃんの援護と救助に向かって、そーちゃんは私がその後に援護に行く』

「で、でもそれなら二人それぞれの場所に行ったほうが、効率がよくない？」

それに、暁もたくさんの浪士を相手にできるの？」

『確かに、そのほうが効率がいい。でも護身術だけのちづるんが無事、平ちゃんの所まで浪士に遭遇せずに行けるなんてことはない。だったら少し時間を食っても、二人の所へしっかり行けるほうがいい。

そしてちづるん知ってる？あたしけっこう剣術できるんだよ？大丈夫。殺やられたりなんかしないから』

「っーーーーわかった」

ちづるんは、苦渋の思いだけれど頷いてくれた。  
昼間の柵屋での行動のこともあるのだろう。

怪我をする予定の人「沖田十平助」は、怪我をしたのにイレギュラ  
ーの存在で、ちづるんが入った時には、斬り殺されていた予定の者  
が、生きていてちづるんが殺<sup>や</sup>られたりしたら、それこそ笑えないと  
いうか、この世界のバランスが思いっきり崩れてしまう。

それにちづるんがいたんじゃ、「あれ」が使えない

『それじゃあ、あたしが先攻して行くよ。――合図をしたら一直  
線にあたしの声の元まで来て』

足で土を蹴り倒し、ぽつかりと闇の広がる入り口へ駆け込んだ

瞬間、屋内だからこそ<sup>こも</sup>籠る濃度の高い鉄の香り

暗いから分らないが、ぴしゃぴしゃと足を踏みしめる度に  
聞こえる紅い液体の音

屋内の様子を伺う時間も無く、一つの体がこちらへ向かってきた。

「うおおおおおおお!!!」

『――残念。ばいばい』

素早く刀の持っていた腕を切り落とすと、追撃で心臓を一刺しに突いた

ああくそ！、もろ返り血浴びちゃった

その後も一人、また一人と斬っていくと、見慣れた背中を発見できた

『ぼっさん！平ちゃんどこ！？』

「暁か！・・・すまねえ、平助は奥だ。頼めるか？」

『了解！頼まれた！』

ぼっさんの横を通り過ぎる時、ついだとばかりに新八と対峙していた浪士の目に刀を差し込み、横から向かってきた浪士には腹に深い一太刀を浴びせた

「やるじゃねえか！」

新八が関心した声をかける

『へへん！んじゃここらへんは任せたよ！』

走って奥へ向かう間に、出来る限りの敵は切り捨てていく  
すると、突き当たりの右の部屋から剣特有の激しい金属音が聞こえ

てきた

足音を沈めて物陰から様子を伺う

平助はすでにフラフラの状態で額から血を流していた

「……私には戦う理由がない

君たちが退くと言うのなら、無闇に命を奪うつもりはありません」

「――オレらには、理由があるんだっての。長州の奴らを、見逃すわけには――」

平助の体がグラリと大きく揺れた

「決めつけは歓迎できませんな。私は長州に与する者ではありませんせん」

「なら、どうして池田屋なんか――」

喘ぎ喘ぎの声や剣先がぶるぶると震えていることから、もう限界が近いことがわかる

対峙していた男は、平助に背を向ける

「待ち、やがれ……!」

立ち去ろうとする浪士を追いかけようとして、平助は血だまりに足を取られ体が傾いていく

『おっと・・・大丈夫かによ?』

「は・・・? 暁・・・?」

走りこんで腕で支え床へ倒れこむ衝撃を緩和する

『もう身体が限界。選手交代だな』

さすがに持ち上げることは出来ないから、引きずってもし、他の浪士が入ってきてても分からない所へ移動させる

「ばっかやろう・・・女に任せられる、わけ、ないだろ・・・」

『そういうのは、ちゃんと立ち上がれる人が言いなさいーほら、少しの間だけ』

言葉とは、裏腹に平助のまぶたが下がっていく  
別に、身体が限界なだけで気を失ったわけではないけれど・・・

「あなたが彼に入れたのは薬ですか?」

『そうだよ。睡眠薬。というか麻酔薬ってところかなー久しぶり、きゅーちゃん』

振り向いた先には、向こうもまたこちらを見つめている天霧だった  
これが、千鶴と行動を共にしたくなかった二つの本当の理由だ

『これ以上、無理されたら危険だからね』

一つは、平助に薬品を注射で投与するから

「あなたは新選組に属していたのですか？」

もう一つは、きゅーちゃんと関係があることがバレてはいけないから

『ううん。私もあなたたちと薩摩みたいな関係。新選組に恩がある  
わけでもないし、居候だけだね』

さて、きゅーちゃんの用はもう済んだんでしょ？これ以上手を出す  
気がないと嬉しいんだけどな。』

「ええ。我々の用は済みましたので今日のところは退かせてもらい  
ます。ーーもう一人はまだのようですが・・・」

はあ、というため息と共に、天井に顔を向ける  
ここは静かといえど、まだ他の部屋では激しい戦闘が繰り返されて  
いる

『そのようだねえ。まあちー様はほつといても大丈夫だと思うけど、  
きゅーちゃんはこの部屋から早く出てったほうがいいと思うな』

そう言うと、暁は窓を開け、力の限り叫んだ

『ちーづーるー！ー！ー！おねがーい！！奥のへやー！ー！ー！ー！  
！！！！』

叫び終わるとニツツと笑って天霧に振り向く

「はあ……。あなたは少しー」

『ごめんね。あたし、わざわざ戻って呼びに行くなんてめんどくさ  
いこと、したくないの』

天霧の言葉を遮って手をひらひら振るう

『そんじゃ、あたしはちー様に会ってくるから



「……………じゃ……………また会いましょう？」

「……………また何処かで会う運命なのですね。ではまたいずれ」

天霧が闇に溶け込むのと同時に

暁は窓から一階の雨よけ屋根を掴むと身体の反動を生かして屋根の上ののった

月明かりに照らされた部屋

向かい合っている二人に分からないように微笑む

『さあ、今度はどうなるかにゃ？』

いざ、部屋に踏み込もう

桔梗 \*そして私は、突入しました\* (後書き)

意外と長くなってしまっている池田屋編

しょうがないじゃないか！天霧とも風間とも絡ませたいんだから！

というわけで、もう少しお付き合いください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1571p/>

---

\*\*\*剣華\*\*\*

2011年11月18日08時51分発行